

# 基本概念 5 点

すでに訓練段階 8 点について説明したが、それらを実行するうえでさらに理解すべきことは、ここで説明する基本概念 5 点である。騎乗にあたり、我々は下記に示す 5 点を明確に理解して騎乗していかなければならない。

1. 歪曲（ゆがみ）
2. 真直性
3. 内方姿勢
4. 湾曲
5. 内方姿勢変換

## 1.歪曲

馬には生まれつきの歪みがあり、多かれ少なかれ右なり左に歪んでいる。このような現象は一般的に母体内の胎児の状態によって起こるといわれている。そのほか心臓が左側にあるために、危険に際し本能的にその心臓をかばうために起こるともいわれている。また、前駆が後駆より狭いという馬の持つ体型によっても起こるといわれている。決定的な原因というのは、まだ明らかにされてはいないが、上記に述べた事柄はひとつの要因であり、そのほかにもまだ考えられる要因は多くある。

一般にこの生まれつきの歪みは、比率的にだいたい 7 対 3 の割合で後駆は前駆に対して右側に位置している。まっすぐな馬の状態の場合、前駆は後駆の前方に正しく位置している。つまり、左後肢は、左前肢の方向に、右後肢は右前肢の方向に踏歩することができる。

一方歪んでいる馬の状態の場合、後駆が前駆に対して右側に位置しており、左後肢は両前肢の中間に位置し、右後肢の外側（馬場の内側）に位置している。

このように馬の歪みを判断する場合、前駆に対しての後駆の位置および後肢の踏歩状態によってその馬の歪みを判断することができる。理想的には、左右の後肢をまっすぐに左右の前肢の方向に踏歩するのが望ましい。

そのほか、馬の頭部と頸部のつながり状態、および頸部からキ甲へのつながり状態、さらには脊椎から尾骨にかけてのつながり状態を見ることによって、詳しくその馬の状態を知ることができる。

これら馬の生まれつき持っている歪みは、Lクラスまでの運動課目によって矯正することができる。例えば斜横歩、輪乗りの開閉、速歩、駈歩での“肩を内へ”、中間駈歩、そのほかMクラスでは側方運動などである。

## 2.真直性

真直性とは、前駆が後駆の前方に位置し、馬体の縦軸が一蹄跡線上に一致していることであり、直線上においても曲線上においても馬体の縦軸がそれぞれの線上に一致していれば、その馬は真直であるという。

一方馬体が歪曲し、後駆が前駆に対して右側に位置している場合、どのようにして馬をまっすぐにすべきだろうか？このような場合、騎手は馬の右前肢が右後肢の前方に位置するように、右脚を少し後方へ引き、馬の右後肢をわずかに前方へ進ませるようにして右前肢に合わせ、さらに左脚で後駆の外方への逃避を防ぐと共に、左手綱で馬の肩口の屈折と逃避を防ぐ。そして、右手綱は馬の口を引かないようにしながら前駆を右へ誘導する。この際最も大切なことは、旺盛な前方への推進である。

馬を真直に歩かせるためには、すでに〔1〕歪曲の項で説明しているように、Lクラスまでの運動課目を使って行うことができるが、もし馬に正しい真直性が確立されていれば、正しい図形騎乗を行うことができる。

## 3.姿勢

ここで述べる姿勢（注1）とは、馬体全体にわたる湾曲ではなく、馬の項およびガクのみの譲りである。馬が正しく内方へ姿勢をとっているときは、項とガクを譲って、立髪（馬の頸の上縁部）は軽く内方へかたむいている。

このとき、騎手は馬の内方の眼と鼻孔をわずかに見ることができ、しかも馬の両耳は同じ高さを保っている。もし馬の片方の耳が他方より低ければ、その姿勢は正しくない。ここでいう姿勢というものは、すべての曲線上においてはもちろんのこと、直線上においても多少は内方へ姿勢をとって騎乗されるものである。ただし、ある一定区間の直線上をまったく内方へ姿勢をとらずにまっすぐに歩くことがある。

また、馬に内方へ姿勢を要求するのは、項およびガクの譲りと柔軟性を求め、口向きを促進するためと、最終的に透過性を得るためである。もし馬が正しくかつ確実に内方へ姿勢をとって歩くことがで

きたら、必ずや、真直にも歩くことができ、その逆も可能である。だから、このような内方への姿勢騎乗は直行進騎乗と併せ、必要不可欠なものである。

注 1：日本において、内方姿勢というのは馬体全体にわたる湾曲と解釈されているが、これは [4] の湾曲のことである。しかし、この項においては、馬の項およびガクのための内方への姿勢である。

#### 4.湾曲

湾曲とは、特に馬の肋の部分で湾曲というが、それは馬体全体にわたる内方姿勢である。一般的には巻乗り（直径 6 m）騎乗時における湾曲が最も大きく、そのほか隅角通過時や蛇乗り騎乗時などにおいてもかなり大きい。(注 2)

注 2：湾曲と屈撓とはよく誤って理解されているが、湾曲とは馬体全体にわたる馬の側面の湾曲をいい、屈撓とは、馬の前後の収縮状態をいう。すなわち、それは、馬の頭部（項・ガク）と頸部（頸礎）の前後屈撓であり、後軀（腰関節・膝関節・飛節）の屈曲度をいう。

#### 内方姿勢騎乗

行進中の方向変換を正しく行うためには、騎手は馬に必要な応じた姿勢と湾曲をとらせなければならない。その姿勢と湾曲は、馬の項―首―脊椎―尾に至るまで一様な湾曲を示し、その縦軸は行進する線上に一致していなければならない。そして、それによって、後肢は前肢の方向に正しく踏み込んで行くことが可能になる。これを我々は内方姿勢という。我々は騎乗中このような内方姿勢を絶えず馬に要求している。 それでは、ここで具体的な内方姿勢の取り方を説明しよう。

##### [1] 内方姿勢の扶助操作（右手前）

###### 第一期

騎手は初め馬に半減却扶助を与える。

###### 第二期

このとき、騎手は重心を少し内方に移す。そして、内方脚は腹帯直後に保ちつつ、内方股（骨盤）と内方座骨を前方へ圧出する。内方踵と内方膝を押し下げる。

一方、外方脚は腹帯の後方、約 1～2 拳の所に引き、馬の後軀が外方へ逃げないように制限（ま

たは支持)する。内方手綱を軽く控え、馬の頭を少し内側へ向ける。このとき、外方手綱は初め少し強める。これらの操作を同時に行うことによって、馬の肋は内方脚を中心軸として側方に湾曲する。また、初め外方手綱を弛めるとするのは、馬を楽に内方へ向けるためである。

すなわち、もし馬が扶助をよく理解していれば、内方手綱の控えに対して拳との連絡を失うまいとして、首の外側を伸ばすからである。このことは、初期調教の段階において、馬はすでに片側扶助を学んでおり、それによって頭頸の伸展をも理解しているため、内方手綱の控えと外方手綱の弛めによって、馬は容易に首の外側を伸ばして、内方姿勢を取ることができるのである。但し、外方手綱を引き過ぎたり、外方手綱を弛め過ぎて外方の肩口を屈折させないように注意する。

### 第三期

このようにして、馬が項およびガクを譲りつつ、頭頸を内側へ向けたら、次に内方手綱を少し弛めると同時に一度弛めた外方手綱を再び控えて、馬の頭頸を正す。もちろん、このとき更に腰・脚にて馬に推進を与えることは、怠ってはならない。このようにして、最終的に馬の外側の首が外方手綱に出てくるようにする。そうすると自ずと外方に支点を得ることが出来る。

ここまでの基本的な内方姿勢を取る際の扶助操作であるが、ここで最も重要なことは、馬の項およびガクの譲りがあるかどうかである。これまで、馬はいったいどのような状態であるべきか、ということ再三説明してきている。すなわち、「騎手の作用」の項では、それぞれの体重・脚・手綱扶助の役割とその操作を、そして「減却扶助の意義と目的」、そして更には「訓練段階8点」「基本概念5点」の項において、正しい馬の姿勢と運動状態についてである。もしこれらのことをよく理解していれば、馬はいったいどうあるべきか、ということがわかるはずである。

一方馬が正しい扶助操作を理解していれば、自ら姿勢を取るものである。肝心なのは、常に馬は透過しているべきであるということである。馬は内方脚を中心として馬体を湾曲するべきであり、内方脚に対して屈撓をしていくべきである。

すなわち、馬が透過していれば項およびガクは柔軟に譲っているものであり、逆に項およびガクが柔軟に譲っていれば、馬はより透過してくる。それではここで基本的な両手綱と両脚の役割をまとめてみよう。

内方手綱一馬の姿勢を取ったり、誘導する程度に使う。外方手綱一馬の外側の肩口(頭・首・肩)が、屈折しないように正しつつ、その肩口を蹄跡上に一致させるように支持または制限する。内

方脚一腹帯直後にて馬が内側に入らないように押さえると同時に、推進に努める。外方脚一腹帯後方約1～2拳の位置で、馬の後躯が外方に逃避しないよう抑えると同時に、支持する。

これが基本的な両手綱と両拳の役割であるが、更に詳しく説明してみよう。

馬というものは、常に扶助に従うべきである。しかし、もし騎手が誤った扶助操作を行えば馬はそれを嫌い、反抗する。また、もし馬がまだ人間の扶助に慣れていなかったり、知らなかったりする場合は、騎手のより正確な扶助操作が大切である。

すなわち、騎手の扶助操作と馬の取る行動とは、絶えず合致しているべきであり、騎手は馬をよく理解するよう努め、徐々にその要求を高めるべきである。最初から多くを要求したら、馬はそれを嫌う。騎手は常に、その馬、その馬に応じた要求をし、馬が精神的にも肉体的にも可能な状態においてのみ、その要求を高めていくべきである。

もちろん、この際騎手の馬術知識、技術、感覚が大切であることはいままでもない。これらが備わっていれば、騎手は正しい扶助をその馬に応じて要求することができ、また、その要求を高めていくことができる。

そういう意味において、これまで説明してきた基本的扶助操作というものは、先人が長年にわたり行ってきた方法を確立させてきたものであり、それは、馬という動物の本能、または習性というものを理解したうえで確立させてきたものなので、すべて理にかなっている。

だから、我々が馬に乗るうえにおいて考えるべきことは、何をすれば、馬はどんな行動を取るかということである。そして、どうすれば馬は最も速やかに、かつ従順に我々の扶助を理解するかということである。しかし、理にかなっていないことをどんなにやっても、馬はまったく理解するはずはなく、かえって混乱する。それゆえ、我々は正しい扶助操作を理解し、実行していかなければならない。それが基本的な扶助操作なのである。

さて、我々が馬に乗るとき、何を目的として乗るべきかということ、「常に馬を真直に、かつ活気よく推進する」ということである。

のことがすべてであり、馬が真直に、かつ活気よく、一定のテンポとリズムで歩いていれば、騎手は最も乗りやすいはずであり、馬も歩いていて歩きやすいはずである。そういう中で、騎手は自分自身の姿

勢とバランスを考え、馬に正しく、かつ明確な扶助を与えていくべきである。騎手は、いついかなる場合でも、真直に、かつバランスよく、柔軟に馬上にあるべきである。

## 内方脚と外方手綱の使用方と重要性

騎乗中大切なことは、騎手の姿勢はもちろんのこと、両手綱、両脚であるが、その中で最も大切なことは、内方脚と外方手綱である。

すなわち、馬というものは左右均等で、かつまっすぐであることが理想であるが、そのような馬はほとんどなく、大半は多かれ少なかれ、左右不均等である。しかし我々はそれをできるだけ左右均等に、かつまっすぐにするように努めるべきであり、それが調教の原則でもある。

馬というものは、一般的に両方の手綱を同時に使われることに苦痛を感じるものである。このことは特に直行進においていえることであり、特に若馬、またはまだ扶助を理解していない馬にあっては、両手綱の同時使用を嫌う。

なぜなら、そのような馬はまっすぐに歩くことができず、左右の馬自身のバランスがまだ十分でないからである。このことは、かなり調教の進んでいる馬にあっても同様で、手綱の使用には十分な配慮が必要である。

馬が扶助をかなりよく理解してきたら、両手綱の同時使用は可能であるが、それは短時間であって、長時間にわたって使用されてはならない。すなわち、それは半減却扶助操作の際である。それが第一期の両手綱の控え操作である。しかし、その後は必ず第三期のように、内方手綱を弛めると同時に外方手綱を控えて、外方に支点を求めべきである。このことは、輪線運動においてはもちろんのこと、直行進においても同様に、多かれ少なかれ外方に支点を求めさせておいた方がよい。

なぜなら我々は騎乗中、絶えず頻繁に左右への回転を行うため、直行進をする時間、または距離が少ないからである。しかし、そうはいつでも直行進の際、前方または後方から見たとき、馬はまっすぐでなければならない。その馬の頭、鼻面はまっすぐで、四肢はまっすぐに前方へ踏歩し、また、その尾はまっすぐ自然に垂れ下がっているべきである。

そのためには、両手綱が均等に馬の両口と連絡がとれていなければならない、また、そのときの両拳は受

動的に後方からの馬の前進運動を受け、保たれていなければならない。そういう状態においては、両拳は左右均等であるということができ、馬は透過していなければ、このような状態にはなり得ない。

ここで問題なのは、馬の真直性と両手綱、両脚の左右均等であるが、これは解釈の仕方ではないだろうか。基本的には、どんな場合でも脚は能動的なものであり、手綱は受動的なものである。これは直行進において特にそうあらねばならず、両手綱は受動的に後方からの馬の前進運動を受け、保たれていなければならない。これが我々の最終目的であり、我々は馬を常に左右均等な状態にしなければならない。

なぜなら、我々は騎乗中、直行進から曲線運動、そして再び直行進という騎乗をするからである。そのようないろいろな運動をするためには、馬が外方に支点を求めて歩くことを理解していなければ、円滑な運動の移行は不可能である。

このような意味において、直行進においても多少は外方に支点を求めさせておいた方が望ましく、輪線運動においては、当然、外方に支点を求めさせておくべきである。そのために必要なことが、内方脚と外方手綱による騎乘法なのである。

それではいったい、なぜ、外方に支点を求めさせるのか？ 理想的には馬の口向きが左右均等であることが望ましい。しかし、実際には曲線運動時における馬のバランスというものは、多少のアンバランスを要求されるものである。

なぜなら、曲線運動時において、馬は外方よりも内方に、より負重がかかるからである。つまり、内方前後肢の回転度は外方前後肢の回転度よりも小さいということで、それだけ内方前後肢に負重が多くかかっているということなのである。

そのため、馬は直行進時のようなバランスは保てなくなり、アンバランスの状態でも回転していかなければならなくなるのである。そのようなアンバランスの状態をバランスよい状態に保つためには、内方へかかる負重をカバーしてあげることが必要で、そのためには、多少外方に強い支点を求めさせておいた方が、馬はバランスよく保つことができる。それによって、内方後肢はなめらかに馬体下へ踏み込みやすくなるのである。この際、大切なことは、内方拳の扱い方で、この内方拳、または内方手綱の役目は、馬の姿勢をとったり、維持したり、誘導したりする程度の働きで、決して強く引いたりしてはならない。

もし、内方手綱を引いたり馬が強く内方に支点を求めていたりすれば、馬に正しい内方姿勢をとらせることは困難になり、更には、馬の内方後肢の馬体下への踏み込みを妨げることになる。それ故、内方よ

り外方に多少強く支点を求めさせることが必要なのである。

更に付け加えると、特に巻乗りをを行う際、もし馬が正しく外方に支点を求め、正しく騎手の扶助に従っていれば、騎手は内方拳を譲った状態で巻乗りを行うことができる。

すなわち、馬というものは、騎手の内方拳の譲りによって、よりなめらかに巻乗りを実施できるのである。もちろん、この際、騎手の内方脚の馬体の内方への入りに対する抑えと、力強い前方への推進が効いているのは当然である。

このような内方脚の役割が十分果たされていないければ、巻乗りをを行う際、内方拳を譲ることはできない。それ故、最も大切なのは、内方脚と外方手綱であり、それらを捕う意味で、外方脚と内方手綱のそれぞれの役割が十分果たされていないなければならない。

騎乗中における我々の扶助は、左右不均等な使用による総合作用であり、それが最終的に左右均等な扶助操作となり得るのである。

内方姿勢騎乗を説明するのに、かなり物の考え方的なものを付け加えたが、ある意味では、それが騎乗の際に特に大切ではないかと思い、いろいろ書き並べた。

**しかし、かなり核心に触れた説明をしているつもりなので、すでに説明したそれぞれの項を繰り返し読み、理解に努めてほしい。**

D S T コラムへのご質問・ご感想をお待ちしております。